

祖母の瞳は訴える

西原町立西原中学校 三年

喜納

碧

祖母の家でたくさんの写真を見た

深い紺碧の神秘的な海

真っ赤に燃えているハイビスカス

若々と生茂っている木々

そして

今にも鳥唄が聞こえてきそうな島人の笑顔

写真はどれも白黒だったが

平和の色で染められていた

私の横で腰の曲がった祖母が言う

「あんまり覚えてないけどねえ…

昔にも平和な時があつたさあ…」

祖母の瞳はずっと遠くを見つめている

私は毎年そんな祖母を見る

テレビに写される沖縄戦を

両手を合わせ涙を流す祖母

テレビに写される沖縄戦を

何も言わず顔を曇らせ見ている祖父

私の知らない二人の表情

頭の中に焼き尽く光景だった

毎年欠さず平和の礎に行く祖母

「父ちゃん今年も来たよ」

八十二歳の祖母が三十三の父に会う

礎に刻まれた一人の男性の名を

愛しそうに悲しそうに

ゆつくりとなでる祖母

その横で初めて見せた母の涙

後ろで立ち尽すしかできない幼い私

テレビや本の中で言う

六月二十三日 終戦

終わった 終わったのか

…なら何故…

私の瞳に写されるたくさんの人々は

今も泣いている苦しんでいる

心の叫びを訴えている

私よ

もつと目を見張れもつと耳を澄せ！

これが戦争だ戦争なんだ

終わっても尚人々を苦しませる

いえない傷跡を残し続ける

祖母の瞳は訴える

同じ過ちを二度とくり返すな

今ある平和を逃げぬように

しっかりと握り締めろと

私はそれに応えたい

私を守ってくれる父母や祖父母を

私が守れるように

青く美しいこの島に幸せの鳥を運びたい

皆が笑っていられる沖縄のために

私は何ができるだろうか

戦後から今年で七十年

今から七十年後まで

祖母から聞いた沖縄戦を

風化させることなく私は伝えていく

沖縄を覆う雲は今日も

大人達子供達の優しさで色付いている

そんな雲の下

昔の平和な島の姿を

この島に青い鳥を飛ばすまで

ずっとずっと

私は平和を握り締める